

ー ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ ー

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2010

ー ヨコハマ アイズ ー

財団法人 横浜市青少年育成協会

“EYES”は、

Every Youth, Extensive Support(すべての青少年に幅広い支援を！)を略し、

青少年を見守り、育てる複数の目、育つ芽、そして愛をイメージしています。

「青少年を温かく見守り、応援しよう」という思いがひろがっていきますように…。

発行によせて

虐待、いじめ、暴力、不登校、ひきこもりなど、子ども・青少年が孤立化している実態は、日本の将来を憂慮するほどの大きな社会問題となっています。

財団法人横浜市青少年育成協会では、横浜市の「かがやけ青少年プラン後期計画」や「中期4か年計画」などの施策と連動し、平成18年度から22年度の5ヶ年間、「青少年の居場所づくりの推進」「青少年の健全育成」「放課後児童育成」「青少年の体験活動の推進」「青少年4施設の運営」などの取組みを通じて、横浜市における青少年の育成事業を推進してまいりました。

今回、協会がこれまで取り組んできた育成事業について、地域や団体、施設、学校教育とどのように連携し、どのような取り組みをしてきたのか、また子ども・青少年がどのような課題を抱えているのか、を日頃青少年とともに活動されている指導者・育成者、NPO関係者、行政の方々にお伝えするため、本誌を編集いたしました。

本誌では、横浜市の「中期4か年計画」の「子ども戦略」のうち、(1)地域の様々な人たちの力によって子どもたちを育成するとともに、子どもたちの参加によって地域に活力を与える仕組みや、(2)子どもが孤立せずにそれを乗り越えられる機会や場を家庭や学校、地域に生み出していく、(3)高校生、大学生が積極的に社会に関わる姿勢や職業意識を醸成するため、多用な社会参加や職業体験の機会の充実、(4)ひきこもりなど困難を抱える若者は就労に向けて一步一步階段を上がるように経験を積み重ねながら自立していくための支援の4つの戦略に対応した取組みや事例を紹介しています。これらの事例がこれからの地域の青少年育成活動の参考となることを願っています。

今後も本誌の編集・発行を通じて、地域の青少年育成活動を“掘り起こす”“情報を蓄積する”“情報を発信する”“活動をつなげていく”といった機能を充実させ、協会が横浜市における青少年育成活動の中核的な役割を果たせるよう、努力していく所存です。

今後とも皆様のご支援、ご指導をいただきますよう、お願い申し上げます。

なお、本誌の発行に際し、地域や団体、施設での取組事例や本誌に対するご意見、ご感想がありましたらお知らせいただきますよう、併せてお願い申し上げます。

平成23年3月

財団法人 横浜市青少年育成協会

理事長 川本 守彦

YOKOHAMA EYE' S 2010

目 次

.....
テーマ「子ども・若者の『育ちの場』の創造ー子ども・若者の成長を願う取り組みー」
.....

第1章 地域の力によって 青少年を育成する

青少年の参加によって地域に活力を生み出す取り組み

- I : 緑区「十日市場中学校地域交流事業」の立ち上げ
(財) 横浜市青少年育成協会 平野 嘉昭 2
- II : 「中学生の育ちの場」が地域にあることで、子どもも大人も育ちあう
NPO 法人グリーンママ／緑区子育て支援拠点「いっぽ」 松岡 美子 6

第2章 青少年の「居場所」を創出するかかわり

- I : 横浜市青少年交流センターでの「青少年の居場所づくり」
(財) 横浜市青少年育成協会 伊 藤 豊 10
- II : 空間・時間・仲間から見える「青少年の居場所」
(財) 横浜市青少年育成協会 中居 正威 14
- III : 横浜市青少年交流センターに期待するもの
神奈川大学 久田 邦明 18

第3章 高校と連携した、青少年の科学・自然・社会体験プログラム

- I : 高校と連携した青少年の体験活動事業
(財) 横浜市青少年育成協会 富岡 克之 22
- II : 横浜青少年サイエンスセンターの取り組み
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 相川 弘二 25

第4章 困難を抱える若者への就労支援の取り組み

- I : 団体・地域と連携した若者の就労支援
～横浜市野島青少年研修センターにおける「自立支援事業」の展開～
(財) 横浜市青少年育成協会 二瓶 信一 28
- II : よこはま型若者自立塾「JOB CAMP」
NPO法人ヒューマンフェローシップ 神垣 匠吾 31

第1章

― 地域の力によって 青少年を育成する

青少年の参加によって 地域に活力を生み出す取り組み ―

◆Ⅰ 緑区「十日市場中学校地域交流事業」の立ち上げ

(財)横浜市青少年育成協会 平野 嘉昭

◆Ⅱ 「中学生の育ちの場」が地域にあることで、子どもも大人も育ちあう

NPO法人グリーンママ／緑区子育て支援拠点「いっぽ」 松岡 美子

I 緑区「十日市場中学校地域交流事業」の立ち上げ

(財) 横浜市青少年育成協会 平野 嘉昭

横浜市緑区十日市場地区は、市内でも比較的緑に恵まれ、都会でありながらもゆったりと時間が流れるような田園風景を今にとどめている。

平成18年の夏、中学生と地域の大人が「顔の見える関係」を作ることを目的に実施されたのが「夏ボラ」事業（十日市場中学校地域交流事業）であった。横浜市立十日市場中学校の福祉委員を中心に中学生23人が、地域の12人の大人とともに地域活動を体験した。活動先は、学校の裏手にある「新治市民の森」や近隣の公営団地で月1回開かれている「お楽しみ昼食会」の他、「三保ねんじゅ坂プレイパーク」「十日市場地域ケアプラザ」、そして「十日市場団地」での5ヶ所であった。

夏の暑い日の中、中学生たちは慣れない作業にも関わらず、活動先のスタッフの指導を受けながら一生懸命に地域活動に取り組んだ。

1 「地域の中で中学生が育つ」ために ～「十日市場中学校地域交流事業」の始まり～

(財) 横浜市青少年育成協会（以下、「育成協会」と言う。）は、平成17年、「地域の人々が学校教育を支える仕組みづくり」を推進するため、新たなモデル事業について「事業開発委員会（委員長：中村一雄）」を中心に検討を行っていた。当時、私は担当課長としてこの事業に関わることができた。

育成協会の前身である（社）横浜ボランティア協会時代には、市立大鳥小学校（中区）をモデル校とした「ボランティア大鳥¹⁾」の事業を立ち上げ、地域の人々が地域の青少年育成のために、地域の人材をコーディネートする仕組みを作り上げ、同小学校の保護者や保護者OBを中心に主体的に活動を継続していた。このような事

業を今度は中学校にも広げていきたいという事業開発委員会の熱い思いもあり、市内の中学校を対象としたモデル事業を模索していたところである。

また、文部科学省からは「開かれた学校教育」が提唱され、横浜市教育委員会においても「地域や企業など、外部人材の協力を得る『地域人材の活用促進』」が学校の教育方針として掲げられていた。

育成協会でもこれらの背景を踏まえ、中学校での地域人材活用のモデル事業を展開するためにさまざまなアプローチを進めていった。市立中学校長会の協力により、モデル校として協力していただける学校を探したところ、緑区にある十日市場中学校が手を挙げてくれた。さっそく、事業開発委員会をベースに教育関係者・市民ボランティア・社会福祉関係者、十日市場中学校などで構成する「学校・地域人材システム委員会」（以下、「システム委員会」と言う。）を新たに立ち上げ、モデル事業についての検討を開始した。委員会では、「バイクの解体を中学生にやらせてみたら」「お金儲けができるような事業をやらせたらどうか」といったような、中学生の興味や関心に沿った事業アイデアが提案された。

しかし、十日市場中学校長からは「本校はいくつかの生徒指導困難校のひとつであり、教員は日々生徒指導に追われている。ヤンチャな生徒が多いと周りからは言われているが、9割以上の生徒は普段まじめに授業に取り組んでいる実態がある。地域の力が生徒たちの成長を支えてくれることを期待し、今回、モデル校に手を挙げた。学校にボランティア（地域）の方々に来ていただいて活動してもらうのではなく、で

できれば地域の中で生徒たちが育つ場を作ってほしい」とモデル事業に対する期待が語られた。

モデル事業のイメージとして、システム委員会では、前述の「ボランティア大鳥」と同じく、校内に「学校支援コーディネーター」を配置し、学校の要望に対応した地域人材（ボランティア）をコーディネートするシステムを当初想定していた。しかし、十日市場中学校校長からの期待に沿うためには「中学校を中心とした、地域でのモデル事業を創出する」方向で検討していく必要があった。

■「地域交流事業実行委員会」の立ち上げ

まず、地域をステージとしたモデル事業を創出するため、十日市場地区の地域調査を進めていくことになった。“地域が十日市場中学校をどう見ているのか？”また、“どのような連携を日常的に行っているのか”を、地区センター・小学校・ケアプラザ、地域で活躍するNPO団体の他、PTA会長や区役所等、関係者へのヒヤリングを担当職員が精力的に進めていった。

結果、「中学校と地域とのコミュニケーションが十分図られていない」ということがわかった。十日市場中学校の区域は他の中学校に比べて広く、片道30分かけて登校する生徒もいるほどである。その分自治町内会も多く、学校としても町内会長など地域のキーパーソンと日常的に接触できる機会が少ないことがわかった。加えて先生も生徒たちの指導に日々追われており、地域と交流する余裕もない状態であった。

システム委員会ではこれらの結果を踏まえ、モデル事業を立ち上げるための地域の検討委員会として、「十日市場地域交流事業実行委員会」を発足することにした。

構成は、十日市場団地連合自治町内会長、十日市場中学校長、生徒指導教諭、緑区学校連携課長、中学校PTA、そして、システム委員会委員長である。立ち上げにあたっては、当時の連合自治町内会長の協力や助言のお陰で、比較

的円滑にスタートすることができた。

2 「夏ボラ」始まる！

～モデル事業のスタート～

平成18年6月に「十日市場地域交流事業実行委員会」の第1回が地域ケアプラザで開催され、さっそく具体的な事業計画が検討された。

平日は部活等で中学生の参加が難しいため、夏休みを利用しての事業に絞られ、地域の人々と触れ合う機会を作ることを目的に、十日市場中学校の福祉委員の生徒を中心に参加を呼びかけていく計画が固まった。加えて同校のPTAから、PTA会員にも参加を呼びかけることとなった。

■「^{じゅっちゅうせい}十中生の良いたころがたくさん見えた！」

そして、各所で中学生が地域の大人たちとさまざまな活動を体験する「夏ボラ」が始まった。

受入れ団体からは「一生懸命活動に取り組んでくれた」「今回の体験で十中生（地域での生徒の呼び名）の良いたころがたくさん見えました」「今後も友達とぶらりと立ち寄ってもらえたら嬉しい」という声が聞かれた。また、「指示されなくてもテキパキ動く気遣いやセンスの良さに感動」「地元の催事に中学生も参加できる空間を作れたらよい」といった声を、中学生と一緒に活動した地域の大人からも聞くことができた。さらに先生からは、「育成協会が企画し、担当教諭が窓口となり、生徒の募集は福祉委員会の顧問が協力するという連携体制により、とてもスムーズに事業を進めることができた。生徒の中には自主的に地域の行事（健民祭）に参加をする生徒も出始めた」といった評価を得ることができた。

この「夏ボラ」をきっかけに、冬休みも「冬のミニ交流事業」が3ヶ所で開催され、中学生と地域の人々が交流する土壌が次第に形成され始めてきた。

3 新たなネットワークと

地域による主催事業として

「夏ボラ」を実施したことにより、活動受入れ団体、参加した地域大人たちの“十中生を見る目”に、若干ではあるが変化が感じられた。

モデル事業をさらに発展させるため、平成19年度からは、地域の手による主催事業に移行していくために、交流事業に関わる地域の人を増やしていくことを考えた。その年から「十日市場中学校・地域交流事業実行委員会」には、「夏ボラ」受入れ先として協力してくれた団体のほか、青少年指導員、体育指導委員、少年補導員、そして地域で活動するNPO団体にも呼びかけ、「夏の交流事業」の活動受入れだけでなく、事業の企画や運営などにも参画していただくようお願いした。

「実行委員への参加を呼びかけたのは良いが、果たして協力してもらえるだろうか？」という懸念はあったものの、実行委員会を重ねていくうちに育成協会としての考え方にご理解を示していただき、また地元の町内会長にもご理解をいただくなど、第2回目の「夏ボラ」を実施する新たな体制を築き上げていった。

■実行委員が役割を担う

平成19年の夏も前年同様、「夏の交流事業—夏ボラしようぜ！」が実施され、61人の生徒と地域の大人11人が参加をした。

受入れ団体には、平成18年度の受入れ団体に加え、「創造と森の声『横浜の森美術展2』」や「緑区地域子育て支援拠点『いっぽ』」「三保地区連合健民祭実行委員会」が新たに加わり、活動先も多彩となった。(表1)

また、初日のオリエンテーションも前年と違い、地域の実行委員会のメンバーが受付や司会進行、ゲーム指導を担当し、地域主体の事業として発展していく可能性が見えてきた。

その年の秋に開催された十日市場中学校の文

(表1) H19年度「夏ボラしようぜ！」受入れ団体

① 三保地区連合健民祭実行委員会 【三保地区体育指導委員】
② ハーブキッズ「おし花で作品を作ろう」 【旧奥津邸活用実行委員会】
③ 新治市民の森の自然の中で遊ぶ 【新治市民の森愛護会】
④ 市民の手で作られる「横浜の森美術展」をサポートしよう 【創造と森の声「横浜の森美術展2」実行委員会】
⑤ いくぜ！斜面のウォータースライダー 【三保ねんじゅ坂プレイパーク】
⑥ 高齢者が喜ぶ昼食を楽しく作りましょう！
⑦ 赤ちゃんとふれあい、小さな子どもたちと遊ぼう！ 【緑区地域子育て支援拠点“いっぽ”】

化祭には、「にいはる里山交流センター」、「新治市民の森愛護会」、「NPO法人グリーンママ（緑区地域子育て拠点“いっぽ”）」、そして「グループ創造と森の声」が出展や参加をするなど、「中学生が地域の活動に参加」する仕組みだけではなく、地域の活動団体が学校行事に参加するまでの関係性を作り上げることができた。

また、この年の「冬ボラしようぜ！」では、いくつかの活動先でリーダーシップを発揮してくれる生徒が出始めた。受け入れ先の大人たちは「活動が進むにつれて中学生の良い表情がたくさん見られた」「地域に中学生の活躍の場があり、それを地域が見守るというきっかけになったと思う」といった声も聞かれ、中学生と地域との結びつきに、地域の大人たちも手応えをおおいに感じたようだった。中学生もまた、出会いやさまざまな発見によって自分たちが暮らすまちへの関心が高まっていった。

4 中学生が地域を支える

このモデル事業の成果を考えると、まず、地域の中で多様な人々と出会う機会を作っていくことが、地域の中の中学生の成長を図る場の創造につながっていくことである。成長著しい思春期の中学生たちにとって、普段接している親や教師ではない大人との出会いは、多様な価

価値観や考え方に触れる機会でもある。さまざまな生き方に触れることで、自分が何を求めているのかを知り、自分の憧れる大人に出会うことで将来を考える機会にもなっていく。2年目の「夏ボラ」で「創造の森と声」に参加した中学2年生の男子A君は、若い芸術家と「森」で出会い意気投合し、作品を手伝うために「夏ボラ」の活動日以外の日にも何日も通っていた。この話は、関係者の間で未だに忘れがたいエピソードのひとつである。

さらに、悩みを抱えた子どもたちを周辺の大人们が支える“地域づくり”にも発展し得る事業でもある。地域の大人が日常的に中学生に声をかける・挨拶をする、あるいは中学生がふらっと活動先に寄り大人と話をする・または何かを手伝うといった、選択できる「居場所」が多数ある地域こそ、中学生に求められている地域社会なのかもしれない。

■「役に立っているよ」という評価

「夏ボラ」で活動先を見て回ったが、どこでも中学生が大きな力になって活動を支えていた。とかく大人たちは、中学生というだけで距離を置いてしまうことが多い。しかし、「地域の将来を担う人材」と捉え、関係性を地道に作りながら向き合っていくと、中学生は将来だけでなく、地域活動の即戦力となり得る能力を秘めていることが分かる。

そのためには、まず中学生が「自分が地域の中で役に立っている」と感じられることが必要であり、こうした自己肯定感とともに、地域の大人が直接声をかけていくことで「地域の中で育っている」ことを実感できる働きかけや取り組みが大切である。

かつて、老人ホームで嫌々窓拭きをしていた中高校生のボランティアが、偶然通りかかったお年寄りから「ありがとう」と言われ、俄然やる気になったという話を聞いたことがある。

中学生が地域活動に取り組んでいることに対

して、「地域の活動だから当たり前」ではなく「役に立っているよ」と評価し、かつ声に出していくことが、中学生を、ひいては次代の地域人材を育てることにつながっていくのではないだろうか。十日市場中学校交流事業での取り組みは、学校・中学生、そして大人で構成された「地域」という括りの中で、「地域活動の継承」が行われる姿が垣間見える貴重な事例である。

また、育成協会とシステム委員会の取り組みにも触れたい。ただ「仕組みを作り、声をかけて事業を企画し、地域活動を評価する」だけにとどまらず、地域に足を運び、要望や声・そして実態を聞き、キーパーソンとなる団体や人物を見つけ、時間をかけてつなげていったことがこの事業における大きなポイントだったと考える。

地域活動で最も重要なことは、「地域の実態」を丁寧に聞き取り、地域の人々の意向を尊重することである。地域住人でない立場の者が地域活動をコーディネートしていく時、この部分を疎かにしたり見誤ってしまうと、地域のバランスを崩しかねない。コーディネーターとして客観的に見つつも、地域の中に入り込み、共に体験を共有していく「個人」の部分さらけ出す覚悟をスタッフが持ち合わせることが大切であると改めて感じている。この「理屈」と「気持ち」のバランスを上手く取っていくことが、これから私たち中間支援組織に求められることであろう。

1) 「ボランティア大鳥」は、平成12年、(社)横浜ボランティア協会・事業開発委員会のモデル事業として発足した。保護者と保護者OBからなるボランティアグループが「地域の人たちがもっと学校や子どもたちに関わり合い、あいさつや気軽に声かけができるような豊かな人間関係を築いていくこと」を目的に地域と学校のふれあい窓口となり、ボランティア活動をコーディネートしている。現在も、視覚障害の方をサポートしながらまち歩きをするイベントや、公園のクリーンアップなどのイベント企画を行っている。

・ひらの よしあき

(財) 横浜市青少年育成協会 担当部長

Ⅱ 中学生の育ちの場が地域にあることで、子どもも大人も育ち合う

NPO法人グリーンママ／緑区地域子育て支援拠点「いっぽ」 松岡 美子

地域子育て支援拠点（以下、「いっぽ」と言う。）は、平成17年度から横浜市が各区に1館ずつ設置しており、緑区は、私たちNPO法人グリーンママが平成19年度から運営をしています。

事業のひとつとして、0～6歳までの親子が来て自由に遊べ、交流できる場所を提供しています。昔は子どもが生まれると、ご近所の方がいろいろ教えてくれたり、地域全体で子どもの成長を見守ったりしていたと思います。しかし今は、結婚して初めての土地に暮らし、地縁・血縁のない場所で子育てをしている方が多いのは横浜だけではないと思います。「いっぽ」では、子育て情報を提供し、悩みを気軽に相談し合い、仲間をつくることで、子育ての不安感を少しでも軽減して欲しいと思い活動しています。他にも、将来の子育て支援の人材として、また、いつか親になる高校生や大学生の研修の場として活用して欲しいと、ボランティアの受入れを行っています。



1 中学生を受入れてみて

（財）横浜市青少年育成協会から「十日市場中学校地域交流事業（夏ボラ）」の一つとして「中学生の活動先として受入れてほしい」と話があった時、スタッフの中には「中学生の受入れは大変では」「ボランティアではなく、彼らのお世話をしなくてはならないのでは」と、心配する者もいました。

しかし、我が子を産んで初めて赤ちゃんを抱っこしたという親が増えている現在、中学生という思春期の入口の時期に、赤ちゃんともふれあったり、小さな子どもたちと遊んだりする経験は、親がどれだけ子どもを大切に思っているのか、そして親の大変さを理解してもらえる機会になるのではないかと思います。受入れを了承しました。

私は、中学生がボランティアに来た時は、最初に「なぜこのような子育て支援拠点が必要か」ということを話します。そして、自分のお母さんはあなたたちが赤ちゃんだった時にどうだったか、近所にお母さんを助けてくれる人はいたのか、夜泣きが大変だったか、ミルクを飲んでくれなくて大変だったか等を聞いてごらん、と話しています。

中学生ぐらいになると、親との会話もなかなかできない子も多いかと思いますが、「いっぽ」の活動で赤ちゃんとお母さんの様子を見て、自分がどうだったかを親から聞き、そのことから自分がどれだけ親に守られていたか、また、子どもを育てるという事はどれだけ大変かを感じることは、ある意味での性教育であると思います。



■守られていた自分に気づく

中学生たちを実際に親子が遊んでいるひろばに行かせてみると、子どもたちが何を要求するか懸命に聞いてそれに応えようとしたり、赤

ちゃんをこわごわ抱っこしたりと、とてもよく面倒を見てくれていました。彼らの感想を読んでもみると、言葉の分からない子どもの面倒を見ることの大変さや、泣いていた子がお母さんに抱っこされて泣きやむ様子に、お母さんの偉大さを感じたと思っている生徒たちが数多くいました。そして、赤ちゃんが自分の腕の中ですやすやすと寝ていたことが本当に嬉しかった、という感想もあり、今までは親に守られていた自分が、守る存在になれたことの喜びを実感できたエピソードもありました。また、活動の様子を見に来た先生方は「学校とは違った生徒の一面が見えた」とおっしゃっていました。

きっと中学生は子どもたちから慕われたり母親たちから感謝されたりすることで、“自分も役に立てた”という自信になっていったのだと思います。

当初、十日市場中学校の生徒に対して、地域からの評判はあまり良いとは言えず、不安な目で見ていた人も多かったと思います。しかし、「いっぽ」にボランティアに来てくれた生徒たちの姿に、「子どもたちの面倒を一生懸命見てくれて、本当にいい子たちです」と多くのお母さんたちが言ってくれ、学校に対して勝手にイメージを決めつけてはいけないということを、地域の住人として改めて感じました。そして今では、十日市場中学校の制服を着ている生徒を見ると「あ、あのお姉ちゃん（ボランティアに来た生徒）の学校だ」と子どもが言っていた、と話してくれるお母さんもいます。

何年か続けて「いっぽ」で活動してくれる生徒もでてきました。高校生になって学校の友人を連れてボランティアに来てくれた生徒に、利用している母親が「大きくなったね」と声をかけ、また、生徒の方も声をかけてくれた母親の子どもを見て「大きくなったね」と、お互いに言っている姿が印象的です。

地域の中で互いの成長を喜び合える人がいる

ことの喜び、そしてそれをそばで見ている私たちも大いなる喜びを与えてもらっています。



2 中学生が教えてくれたこと

最近では、「夏ボラ」「冬ボラ」の受入れ団体同士で「うちに来ている中学生はいい子だよ」「うちのほうがもっといい子だよ」と、“いい子自慢”が始まるようになりました。

十日市場地域交流事業実行委員会（以下、「実行委員」と言う。）では、必ず校長先生や先生方が顔を出してくださり、「ここに来ると地域の皆さんに生徒たちを褒めていただける、それはとても嬉しいことだ」とおっしゃっています。

この交流事業を通して、「十日市場中学校の生徒たちは本当にいい子たちだよ」というように、地域の見方が変われば中学校も変わるということを実感しています。先生方も、学校全体が落ち着いてきた、とおっしゃっていますが、そう感じているのは私たちも同じであり、学校に行くたびに実感しています。

また、地域のさまざまな場所で自主的にボランティアに参加することを楽しみに感じている生徒たちも増えてきたように思います。そして地域の私たちも、中学生がボランティアに来ることを楽しみに待っていることが、この交流事業を支えているのだと思います。

さらに、中学校の文化祭でボランティアをした生徒が活動で作成したものを掲示したり、学校内でオリエンテーションを行ったりすることで、地域が中学生を受入れ、中学校が地域を受入れるという、双方向の活動ができていると感

じています。

また、この交流事業の成果は他にもあります。

地域でそれぞれ活動をしている団体が、中学生を受入れることでつながり、それぞれの活動に対して理解が深まったことで、地域全体のネットワークができました。地域でさまざまな活動をしている方がいてもなかなか知り合うきっかけがありません。しかし、実行委員会を立ち上げ、また事務局として（財）横浜市青少年育成協会が間に入ってくれたことで、今までつながりのなかった地域の団体がつながることができたことは、とても大きい成果だと思います。

■子どもも大人も育ち合う

中学生の時期というのは、一番社会とつながりがない、一番しんどい時期だと思います。

小学生と中学生では子どもの表情も変わったりしますし、この時期はいろいろな意味で大変な子どもたちが多いのだと思います。こうした中“地域とつながっている”と感じられることは、その子たちにとっても心強いことだと思います。親とは直接的な関係なので、かえって厳しい状況になってしまうことがあります。そんな難しい時期に、親以外の大人と出会う事は大切なことです。

地域が中学生の育ちの場となっているのと同時に、地域の大人たちも中学生を通して、自分たちの育ちの場となっています。

地域には色々な人がいて、互いを知り・思いやることで、まち全体が住みやすくなります。そして、「このまちに住みたい」と思えるような場所になれば、まちや人の雰囲気も変わっていくと思います。

そのことを、中学生たちが教えてくれました。

・まつおか よしこ

NPO 法人グリーンママ理事長、緑区子育て支援拠点「いっぽ」
施設長、緑区十日市場中学校地域交流事業実行委員

第2章

— 青少年の「居場所」を創出するかかわり —

◆Ⅰ 横浜市青少年交流センターでの「青少年の居場所」づくり

(財)横浜市青少年育成協会 横浜市青少年交流センター 伊藤 豊

◆Ⅱ 空間・時間・仲間から見える「青少年の居場所」

(財)横浜市青少年育成協会 横浜市青少年交流センター 中居 正威

◆Ⅲ 横浜市青少年交流センターに期待するもの

神奈川大学 久田 邦明

I 横浜市青少年交流センターでの「青少年の居場所づくり」

(財)横浜市青少年育成協会 横浜市青少年交流センター 伊藤 豊

1 青少年交流センターの取り組み

横浜市青少年交流センター（以下、「交流センター」と言う。）は、子ども・青少年を対象に、自主的な活動や自己表現のための場を提供し、青少年自身が自ら考え、成長していけるよう支援することをねらいとしています。また、さまざまな年代の人との触れ合いを通し多様な価値観を身につけ、社会生活において自己選択力を高めることを目指しています。

「大人の視点ではなく青少年の視点から考える」ことを基本理念とし、教育や管理をするのではなく、青少年にとって「安心して気軽にくつろげる居場所」であるよう配慮しながら、近隣の施設や地域の取り組みと協働し、青少年を育む地域社会づくりに貢献しています。

具体的な活動としては、公募で集まった中学生～24歳までの青少年20人程度が「青少年委員会」として、青少年の視点から交流センターの運営に関わるほか交流センターの行事の企画や実施などを行う活動があります。これは、参加者や利用者としての受け身の立場ではなく作り手として参画し、その過程において自己表現の場の創出や協調性を学んだり、活動を通じた社会性の獲得や自己肯定感を育んだりしていくことを目的としています。

例えば、スタジオを利用する高校生が企画・運営を行う「青少年ライブ」は、演出からパンフレットの制作・宣伝・司会進行から、鉄筋を組んでのステージ製作、出演者の昼食づくりまで参加者全員が役割を持って関わる仕組みが、先輩の高校生から後輩へ受け継がれています。

また、「@楽祭」という施設利用者によって行われる発表会では、大人の利用者と青少年とが参加することで世代間交流をはかるほか、互い



が「イキイキと頑張っている姿」に触れることで、大人は青少年を、そして青少年は地域の大人たちを自然と理解し合うことができる機会となっています。

■「ロビーワーク」と「コーディネーター」

こうしたさまざまなしくみの要になるのが、「ロビーワーク」業務と「コーディネーター」とよばれるスタッフです。

「ロビーワーク」とは、主にフリースペースに集まる青少年たちとの関わり合いや、そこで行われる様々な事業を総称した業務で、日常的な対話を通して信頼関係を築いていくことで、進路や友人関係・恋愛など思春期特有の悩みや、家庭や学校での課題などを、青少年が発信しやすい環境を作っていく業務です。何気ない会話から課題が見えてくることもあり、スタッフは青少年自身による「気づき」を促すような関わりに努めています。

「コーディネーター」は、受付事務のほかにロビーワークやイベントの企画・運営を担当するスタッフです。さらに、カウンターで日々、利用者に接しながら声を聞き、交流センターと利用者の関係づくりだけでなく、大人と青少年とを「つなぐ」役割を果たし、交流センターでの異世代間のコミュニケーションを図る上で大切な存在となっています。



2 8年間の積み重ね

■来館する青少年たち

交流センターに来館する青少年の目的は、「ここに来れば誰かがいるから」「友だちとおしゃべりに」「勉強をしに」などさまざまで、小・中・高校生世代だけでなく、受験生や大学生・社会人など、幅広い年齢層が利用しています。

高校生以上の世代はバンド練習や演劇、ダンス、勉強など、比較的目的をもって来館することが多いのですが、小・中学生にとっては日常的な遊びの場の一つとなっています。

小学生は、地域の広場代わりにし、他校の生徒と知り合い、スポーツなどを一緒にするうちに友だちになる姿をよく目にします。学校以外の仲間ができる機会が少なくなっている今、交流センターは子ども同士の幅広い交流の場となっています。スタッフはロビーワークの一環として、子ども同士をつなぎ、新たな仲間ができるきっかけづくりを行っています。

一方、中学生は少し複雑です。

交流センターが開館して以来、中学生との関わりはスタッフの一番の課題となっていました。中学生たちは、単に遊びに来るというより、有り余るエネルギーの向けどころが分からなかったり、もやもやした気持ちを発散できない子が“居場所”を求めて来るといった感じです。多感な時期の中学生は、学校生活、受験勉強、友だち関係、家庭問題などさまざまな背景を持ちストレスにさらされ感情をうまくコントロールできなくなる時があります。まるでスタッフから叱られるのを待っているかのように、ごみの

散らかし、落書き、あるいは喫煙、いたずらを繰り返します。一方で、彼らからは「自分に関心に向けてもらいたい」というメッセージを感じるのです。

スタッフもしつこいくらいに声をかけ、いつか彼らが理解をしてくれることを信じ、気持ちを伝えていくこと・関わることを決してやめず、続けていっています。

■恩返し？里帰り？

例えば、こんな嬉しいエピソードがあります。開館間もない頃に来館し、さんざんいたずらや悪態をついていた当時の“名物中学生”が、卒業後塗装業に就き、ある時駐車場の壁を「俺が塗ってやる。さんざん迷惑かけたからな」と申し出て丁寧に塗ってくれたことがありました。また、成人式を迎えたといっちは晴れ着姿を見せに来たり、恋人ができたから会わせに来たり、「就職が決まったよ」、そして「ちゃんと（マジメに）やってるよ」など、人生の節目節目に顔を出してくれる青少年たちが大勢います。受験勉強に来ていて、スタッフに進路などの相談を聞いてもらっていた青年が、大学入学後に青少年委員となって活動してくれるなど、“青少年施設”と“利用者”というだけでなく、こうしたスタッフとの関わりによる心のつながりにより、彼らに何かを残せることを、非常に嬉しく思います。

■スタッフが大切にしていること

スタッフが気をつけていること・大切にしていることは「伝える」こと、青少年の成長に「寄り添う」ことです。指導するのではなく、自分が経験してきたことや学んだり考えたりしたことを伝え、彼らが社会に出るまで、見守り・寄り添って支えていくことが「親でも先生でもない」私たちスタッフの役割だと考えています。青少年が迷惑をかけるような行為をした場合は、必ず注意します。反発されることの方が多く、見て見ぬふりをする方が楽かともあり

ますが、一步踏み込むことからお互いの理解が始まると信じています。自分に向き合い、受入れ、関心を示してくれる大人が傍らにいます。これによって青少年は自己肯定感を高め、課題を乗り越えていく力を身につけていくことができるのだと思います。これが、「青少年の居場所」のあり方の一つだと捉えています。

青少年の姿は毎年違います。そして、一人ひとり違います。日々変化し、成長していく青少年に対し、画一的な手法は通用しません。時間はかかりますが、前述のエピソードのように「彼らに伝わったかもしれない」という手応えが、また明日から青少年たちに向き合っていける活力を与えてくれるのです。

3 「居場所」となるために

交流センターで実施する事業は、“青少年が主体的に関わることができる”ことだけが目的ではありません。青少年たちは交流センターで「失敗」を経験することができます。若く、経験が浅い彼らは、事業を組み立てていく過程で上手くいかないことが出てきます。スタッフはその時、失敗をしないように事前に準備をするのではなく（時と場合によっては、そうすることもある）、“取り返しのつく範囲で”失敗する過程を見守ります。交流センターには、失敗したらそこで終わりではなくその経験を次に活かせるような機会もありますし、失敗をフォローする仲間やスタッフがいます。

失敗することを恐れるのではなく、社会に出るまで何回も失敗をし、そしてそれを活かして新しくチャレンジできるたくましい心を身につけていってほしい、そのようなスタッフの願いも事業には込められているのです。

さらに、交流センターにはいろいろな立場や環境、年齢のボランティアや青少年委員、大人のスタッフ、そして利用者が集まっています。たくさんの価値観に触れることで、自分を見つ

め直すことができ、また、失敗を含めた経験を積み重ねることで自分の価値観を広げることのできるのです。これも「青少年の居場所」の役割だと考えています。

例えば、小さい頃から来館している、軽度の障がいがあるAは、今ではボランティアとして事業を自ら企画しています。来館した当初は、なかなか周囲となじむことができずにいました。A自身の努力によることが一番ですが、年齢の異なるボランティアたちが、お兄さん・お姉さんとなりAを支えたり、年少の仲間がAを頼りにしたりなど、互いを認め合う関係性が出来たことで、何事にも自信をもって取り組むことができたのではないかと感じています。またこのことは、彼の周囲にいるボランティアの価値観を広げることにもなりました。認め合い・影響を与え合う仲間と出会えることも、また「青少年の居場所」の役割の一つであります。



4 今後の取り組み

最後に、今後、交流センターが重点的にやっていく取り組みとして、「青少年の居場所づくりを支援すること」と「青少年に関わる人材を育成すること」があげられます。

交流センターには年間約9万人もの青少年が来館しています。近隣からだけでなく、遠方から来館する青少年も数多くいます。その中には、目的のために利用するだけでなく「スタッフに会いに」「仲間会いに」来る青少年もいます。また、来館している数多くの青少年たちも、横浜市全域から見れば、まだ一握りにすぎません。

たまたま現在、交流センターに来館している彼らが、活動をできたり信頼できる大人や仲間たちに出会えたり、心を休めることができる場所が、もっと身近な地域の中に複数存在していることが必要です。また、交流センターで色々なことを学んだ青少年たちが自分の地域に帰り、その力を活かす場所も必要です。

現在、横浜市の取り組みとして「青少年の地域活動拠点」事業があります。これは、青少年が地域の中に安心して過ごすことができたり、さまざまな体験をすることができたり、たくさんの人と出会うことによって、自らの可能性を広げたり、地域の大人が運営に関わることによって、青少年にとって第2・第3の家庭や関係性を築き上げていくことができる取り組みです。

まず、この「青少年の地域活動拠点」とネットワークを築き、地域ごとの取り組みをつないでいくことで情報や課題の共有化を図り、横浜市全体で青少年を育む地域づくりを発信できる拠点となるよう考えています。そして、8年間の実践で積み上げてきた青少年活動やノウハウ等を活かし、各拠点の課題に対応したり、情報提供や地域資源とのコーディネートをすることで、活動をより充実させていくことを横浜市とともに推進していきたいと考えています。

また、毎年、全国の青少年の居場所に携わる人たちを一同に集めた「居場所づくりフォーラム」を引き続き開催し、その時々々の青少年の課題に沿ったテーマのシンポジウムや分科会を実施し、青少年を取り巻く社会環境の変化や事例発表等、情報の発信・収集、人材交流をはかっていきます。

さらに、人材育成として、青少年の「居場所」となり得る場所ではどんなことに配慮し、どのように関わっていけばよいかを、講義と実習とで学び、より専門性を高めた青少年に向き合う研修会なども予定しています。これについては、

将来的にはさらに広い範囲で行い、青少年と関わる人材はもとより青少年に関わってみたいと思っている人材の掘り起こしにつなげ、地域全体で青少年を見守り、継続的に彼らを支援していける社会を実現したいと考えています。

¹⁾ 横浜市青少年交流センターは、横浜市勤労青少年交流センター（昭和45年～平成12年）から転換し、一部を改装した上で平成14年12月に開館した。愛称の「ふりーふらっと野毛山」は、開館1周年を記念し、市民からの公募より青少年らが決定した。

・いとう ゆたか

（財）横浜市青少年育成協会 横浜市青少年交流センター
センター長

Ⅱ 空間・時間・仲間から見える「青少年の居場所」

(財)横浜市青少年育成協会 横浜市青少年交流センター 中居 正威

私たちコーディネーターは、主に受付カウンターに居り、部屋の貸し出しを行ったり、来館する青少年や利用者の大人と対応しニーズを聞き出し事業を企画・実施したり、青少年たちの話し相手や遊び相手などを行う時給スタッフです。コーディネーターの視点から、交流センターが取り組む居場所を「空間、時間、仲間」から考えていきたいと思います。

1 空間

■フリースペース

フリースペースは横浜市青少年交流センター（以下、「交流センター」と言う。）に入っすぐに広がる、誰もが気軽に利用できるスペースです。

イスと机、ソファ、自動販売機（カップめんやパンも販売）、テレビ、利用者や地域の方が寄附してくれた小説や漫画が揃う、交流センターを利用する全ての人が必ずと言ってよいほど立ち寄り、いつも賑わいを見せている場所です。青少年たちは放課後、「ただいま」とやって来ては、ここで待ち合わせをしたり、一人で来ても「誰かしらいる」場であったり、静かに過ごす場であったりもします。

小学生は主にゲーム機やカードゲーム、交流センターが貸し出す遊具のトランプや将棋などを友だち同士でやりながら過ごすことが多いです。中学生はジュースやお菓子を片手に、まったりとおしゃべりをしていることが多いのですがテスト前には真剣に勉強をしている姿が見られます。

また、フリースペースの入口には、靴を脱いで入るスペースを設けており、ここでは座ったり寝転んだり勉強したり、リラックスをして

過ごす姿が見られます。この他、インターネットが使えるパソコンがあり、ゲームを楽しんだり宿題の題材を探しているマジメな姿も時には見られます。



■レクリエーションホール（体育館）

小学生は、今も昔もドッジボールが大好きな様子です。汗びっしょりになって真剣にやっています。他にもバスケットボール、バドミントン、卓球、テーブルサッカーにも興じる姿が見られます。レクリエーションホールの開放時にはコーディネーターが交替でおり、安全管理だけでなく仲間づくりのきっかけを作ったり、時にはスポーツの対戦相手をすることもあります。ここで長年子どもたちの様子を見てきましたが、以前は飽きっぽいのか、10分程度で別の種目に移っている姿が多く見られましたが、最近では疲れてクタクタになるまで遊び続けていること子どもたちが多いと感じます。子どもたちの特徴も、世代ごとに違ってきます。

■自習室

1階フリースペースに隣接するこの部屋は、完全防音ではなく、大声ではしゃぐ子どもたちの声がよく聞こえ「勉強に最適」とは言い難い環境です。しかし、いつも混み合っています。主に浪人生や大学受験生が、朝の10時から閉館の22時まで一心不乱に勉強している姿を、ガラス窓からふと見て刺激を受ける中高生も多いよ

うです。

特に、受験シーズンは満席になり別の会議室を開放することもあります。また、この頃は全体的に張り詰めた雰囲気となり、スタッフたちも「風邪を引かないでね」などと声をかけ、少しでもリラックスできるよう努めています。



■音楽スタジオ

民間のスタジオと比べ、安価なため（2時間350円）常に満室の状態です。主に、高校生バンドを中心に、午前中は大学生や大人も利用しています。音楽に青春をかけた多くの若者たちがここから巣立っていきました。スタジオ利用者たちによる手づくりの「青少年ライブ」も年々充実しています。

■多目的室、401号室

この2つの部屋は壁一面に鏡が設置してあり、年代にかかわらず、ダンス・演劇グループの活動拠点となっており常に満室状態です。ここでも目一杯自己表現をし、活動に夢中な青少年の姿が見られます。

■音楽演奏室

利用者発表会「@学祭」にいつも協力してくれる大人のコーラスグループや、社会人の若者たちの吹奏楽団など、「大人の部活動」が盛んに行われている部屋です。また、地域グループと協働し、乳幼児親子を対象とした気軽なコンサート「ふらっとｂキッズ」を毎月1回開催しています。

■和室

唯一の畳の部屋であり茶室もついています。平日の午前中は、靴を脱いで自由に使いたい子

育てサークルが多く利用しています。また、青少年委員会の定例会も、リラックスした雰囲気です活発に意見が出るようにとこで行われることが多いです。

■会議室（201～203号室、501号室）

会議室として使われるだけでなく、迷惑のかかからない範囲内で、ダンスや演劇の練習も行われます。できる限り制限を設けずに、利用者とともに考えていくことが交流センターの姿勢です。

■料理室

青少年委員による「ワイワイおやつタイム」（月1回）をはじめ、地域の大人の料理教室や青少年が仲間と鍋パーティーをしたり、バレンタイン前にチョコづくりに使われています。

2 時間

学校が終了する15時過ぎから18時頃までは小学生が数多く来館し、ワイワイ賑やかに走り回っている姿が見られます。中学生は同じく学校や部活を終えて、帰宅するまでホッと一息ついたり、塾までの時間つぶしであったり、はたまたあり余るエネルギーを発散しにきたりします。多くは19時頃までには帰宅しますが、家庭の事情もあり、なかには閉館まで交流センターで過ごす子も多くいます。夕飯となるカップめんをフリースペースで食べている姿を見ると、何とも言えない気持ちになることもあります。

高校生や大学生の多くは学校が終わってから電車でやってきて、17時から閉館まで、バンド活動やサークル活動、勉強をしています。県外に住む子も多く、帰宅時間を心配して声をかけるスタッフも多くいます。

3 仲間

約8年間青少年の様子を見てきましたが、最近の傾向として同学年の仲間と遊ぶ子どもたちが多いと感じています。2・3年前までは異学

年同士や、交流センターで知り合った小学生と中学生、または高校生と遊んでいる姿が多く見られましたが、今の大学生や高校生には、小学生や中学生と時間を共有するという考えがあまり存在しないように見受けられることがあります。

異学年間の遊びは、「年長者」が「年少者」を教え導き、「年少者」が「年長者」に敬意を払うという、一種の“社会性”を身につけるいい機会だと考えています。交流センターにはあらゆる年代の青少年が来ているので、スタッフが媒介となっていきたいと思います。

4 コーディネーターから見た「居場所」

交流センターという空間で、青少年たちが仲間と時間を共有する中で築き上げられた「居場所」とは何か、私は次のように考えます。

■社会性を身につける場

私の幼少期は、近所の原っぱで鬼ごっこ、かくれんぼや縄跳び、缶けりなどに興じながら、上の子も下の子も一緒に遊びました。そこに「社会性」が生まれ、小学校に入学しても団体生活をスムーズに過ごす事ができたものです。学習指導要領に「生きる力」が登場せざるを得ない状況が出てきたのも、こうした「幼いときの遊び」がなくなり、小学入学になって初めて「団体行動」「団体生活」に直面し、必要に迫られたことも大きいのではないかと考えます。

放課後の居場所づくりということで学校内で盛んに取り組まれています。異年齢と自然なかたちで出会うことができるのは、交流センターのようなさまざまな人が集まることができる施設の特長であると思います。

■さまざまな青少年が来館できる

交流センターには開館以来、軽度の障がいがある青少年や家庭が困難な状況にある青少年など、元気に青春を謳歌するだけでなく、さまざまな状況にある青少年が来館しています。ただ、

交流センターではみんなが同じように過ごすことができるよう私たちスタッフは心がけています。彼らもボランティア活動をしたり、イベントに参加するなど、新しい自分や可能性、社会とのつながりを見つけています。

■かけがえのない仲間に出会える

開館当初に自習室を利用していた受験生たちは今では全員社会人になり、各方面で活躍しています。スタッフの働きかけもありましたが、個々で来館していた彼らは、苦しい時期にともに同じ目標を持つ仲間としていつの間にか一体感が生まれ、いつからか良きライバル・仲間として一緒に過ごす友人となりました。

交流センターも、まだ施設で活動するボランティアもいなく、試行錯誤していた時期であり、受験生でありながらも「息抜きになるから」と、イベントを手伝い盛り上げてくれ、小学生たちの遊び相手をしてくれた彼らの協力なくしては、今の姿はありえません。大学入学後もその絆は強く、帰省のたびに一緒に顔を出してくれたり、結婚式にお互いを呼び合うなど「かけがえのない仲間」ができる瞬間を、私たちスタッフは共有することができました。

■青少年にとって「ふるさと」の一つ

進学や就職で横浜を離れた後、帰省時に交流センターにおみやげを持って現れる青少年が多くいます。これは、コーディネーターにとって一番嬉しい時でもあります。また、スタッフだけでなく、顔見知りの利用者から「久しぶりだね～」と言われ照れくさそうにしている姿も、夏休みや年末年始によく見られる交流センターの光景です。



「前にここでお世話になりました」と、悪態をついていた姿から想像できないほど、きちんと敬語を使えるようになってあいさつしてくれる姿も、コーディネーターの役割の重要性を感じる時です。学校以外で「懐かしむ気持ち」の持てる環境は、そう多くあるものではありません。

■安全に過ごすことができる場

交流センターでは、残念な出来事も起こります。けがやケンカ、青少年たちが大切にしているものが無くなってしまうことも時にはあります。そんな時は、改めて「青少年を預かる施設としての重要性」を思い知らされます。あたたかい気持ちとともに、厳しく冷静な眼を持ち合わせなくてはと気持ちを引き締めます。

5 時の流れの中で

コーディネーターとして勤務して約8年が経ちました。忘れられない青少年やエピソードは数え切れません。

■卓球を通じて成長をした少年

小学校低学年のころ、一人でやってきて体育館の片隅で他の子どもたちが卓球をしているのを眺めているだけの子がいました。誘ってもなかなか応じず、やっと重い腰をあげたけれど最初はコーディネーターとしか遊ぼうとしない。誉めたりしながら、少しずつ上手になってきました。自信がついてきた様子だったので「他の子とやってみたら」と促しました。やがて多くの子とやるようになり、ぐんぐん上達し、ついには交流センターの卓球大会で優勝したのです。次からは友だちを連れて来るようになりました。

今は背の高い高校生になり、クラブ活動に勉強に勤しんでいます。

■「やんちゃ」たちとの戦い

タバコを吸う、落書きはする、壁紙を剥がす、入ってはいけない場所にあらゆる手段で侵入する、モノを散らかす、通行人にモノを投げる、飲み物・食べ物は放ったらかし、近隣の家の前

で騒ぐ…。毎日が彼らとの戦いで、スタッフ全員神経がすり減っていた時期もありました。

交流センターが「あそこは不良のたまり場。近寄るな」と言われていたなどという噂も聞こえていた6年ほど前。ある時、あまりの惨状と態度に、あつてはならないことですが思わず手が出てしまったことがありました。「必ず仕返しをするからな」と体の大きい中学生に言われ、心配した他のスタッフから言われて裏口から帰宅していたことも今では良い思い出です。なぜなら彼らは、成人になった今でも時々「元気かー」と言って顔を見せてくれるからです。スタッフが異動する際、当時の仲間に呼びかけてくれ、アルバイト先から寿司を「俺たちのおごりだよ」と照れくさそうに届けてくれて一緒に食べたこと、遠方に就職が決まった際、大きなカバンを抱えて現れ、「これから行ってくる」と不安と期待の混ざった顔をスタッフ総出で見送ったこと。あの頃の真正面からのぶつかり合いを、彼らは理解してくれたのでしょうか。社会の「厳しさ」に触れ、落ち着きが見られ、心なしか大人の顔つきになっています。

■育ちの傍らで

スタジオで練習し、最初は「青少年ライブ」の参加者として、そして責任者として運営し、卒業間近には民間のライブスタジオで解散ライブを行った高校生バンドたち。グループ名を描いたプラカードと“ありがとう”と書いたプラカードを用意し応援に行きました。プラカードを掲げると涙ぐむグループも。彼らは受験を終えると、いの一番に合格の報告に来てくれます。

スタジオでの練習から、「青少年ライブ」、そして外へ飛び出しての「解散ライブ」まで、「育った」という感触や喜びを感じています。

・ なかい まさたけ

(財) 横浜市青少年育成協会 横浜市青少年交流センター
コーディネーター

Ⅲ 横浜市青少年交流センターに期待するもの

神奈川大学講師 久田 邦明

1 古い建物の、新しい施設

平成14年12月、横浜市青少年交流センター（以下、交流センター）は、旧・勤労青少年センター（愛称 横浜 Do 館）の建物にオープンした。古い建物を改装した、お世辞にも豪華とはいえない施設ではあったが、横浜市にも居場所タイプの青少年施設が誕生したという意味で、これは画期的な出来事だった。

交流センターには、次のような特徴がある。

第一に、入ってすぐのところに、フリースペースを設けたことである。旧来の青少年施設は団体利用を前提とするものであり、ロビーなどの空間はあっても付随的なものだった。交流センターのフリースペースの場合は、それとは違って、ここが個人や少人数のグループが自由に利用する施設だという、この施設全体の性格を象徴するものだった。

第二に、既存の建物を改装した施設だということである。新築の建物を考えたとしたら財政状況の厳しいなかで実現は難しかっただろう。高度経済成長期のハコモノ行政の考え方にとらわれることなく、何よりもまず新しいタイプの施設の必要を優先させるという現実的な考え方をとったからこそ実現したのである。

第三に、戦後の横浜市の青少年施策を振り返り、その検証の上で計画されて実現した施設だということである。一般に行政施策に対して過去、現在、未来にわたる一貫した方針を期待することは難しい。その時々への対応に追われるからだろう。そういうなかで、現在に至る過去の行政施策を検証した上でこの施設を計画したことは、とりわけ注目される。このことには、あとでもう一度ふれる。

わたしはその2年ほど前に『子どもと若者の居場所』という編著書をまとめていたこともあって、この施設の計画段階から話を聞いてきた。オープンして間もないころのエピソードに思い出すことは多い。

オープン後しばらくして訪れたときのことである。フリースペースの入口近くの柱の脇の台の上にノートが置かれていた。利用者の青少年が交流するためのノートだろうと見当をつけて読もうとした。すると、近寄って来た若者に「利用者のものだから、見ないで下さい」と、丁寧なことばでたしなめられた。あとで知ったことだが、若者は、そこに集まった受験生仲間と協力して、フリースペースに集まる子どもや若者の面倒を見ていたのである。彼は、初代の青少年委員として活躍し、大学へ進学した。

2年目に設置された運営委員会では、近隣の横浜市立老松中学校の校長先生に、「コンビニの周辺に集まる生徒が少なくなった」と、この施設の誕生を歓迎することばを聞いた。青少年施設を警戒したり敬遠したりする先生が少なくないなかで、青少年施設の存在意義を理解する、その見識に注目した。

一周年記念式典のステージでおこなわれた、老松中学校生徒のチャンゴ（朝鮮半島の打楽器）のグループと和太鼓のグループの巧みな演奏に驚いたことも忘れられない。生徒たちは、スタッフのアドバイスをきっかけに、大人の利用者グループの指導を受けて練習を続けたと聞いた。その日会場に応援にやって来た、白いツナギの生徒たちの姿を見て、常日頃スタッフが元気の良い生徒たちと格闘する情景を想像した。

2 全国的な動向のなかに置いてみると

交流センターの運営を引き受けたのは、社団法人横浜ボランティア協会（現在の財団法人横浜市青少年育成協会）である。

当時、協会の事務局長で、この施設づくりの中心人物だった山本一郎さんは、オープンからおよそ1年後、その職を離れるに当たって、職員研修資料『青少年交流センターの可能性 ―横浜市の青少年施設の歴史と協会の青少年育成事業の方向性―』（平成15年3月）をまとめた。

この資料には、以下の三点がまとめられている。第一に、横浜市の青少年施設の歴史である。ここには高度経済成長期以降の青少年施設の動向が整理されている。第二に、交流センターの意義と今後の方向である。ここには交流センターの特徴と共に市内全域を想定したこの施設の果たすべき役割が述べられている。第三に、横浜市の青少年施策への期待とボランティア協会の役割である。ここには青少年行政のあり方と行政の外郭団体の独自の役割が述べられている。

このような簡単な紹介によっても、交流センターが、横浜市の青少年施策の歴史を振り返り、その検証の上で計画されて実現したものであることが理解されるだろう。この資料は、『開館5周年記念誌』に掲載されている。横浜市の青少年育成関係者はもちろんのこと、他の自治体の関係者にもぜひ読んでもらいたいと思う。

ところで、交流センターがオープンするまでの期間に、スタッフたちは、ゆう杉並（杉並区立児童青少年センター）、京都市南青少年活動支援センター、子どもの居場所ホワイトキャンパス（岩手県奥州市）、渋谷ファンインなどの先行する施設を訪問したり、調べたりしている。オープンまでの準備期間は短かったが、このような代表的な事例に学んで知恵を絞っていたのである。

各地の施設にふれたので、続いて、横浜市の

範囲に限られない、全国レベルの青少年施設の移り変わりについて確認しておきたい。青少年施設を文字どおり青少年が利用する施設と理解すれば、商業施設なども含めなければならないが、それは別の機会にゆずることにして、ここでは一般的な用語法にしたがって行政が関わりをもつ施設とする。

まず、戦後すぐの時期には、新しく誕生した公民館が、青年団などの青年の活動の場になっていた。その後、高度経済成長期を迎えると、人口の集中する都市部を中心に、児童館、青年の家、勤労青少年ホームなどのさまざまな青少年施設が建設されるようになる。

これらの青少年施設は、特別な支援を必要とする子どもたちのための施設を除けば、学校教育を補うためのものであったり、地元企業の福利厚生に代わるものであったりした。そのせいで、高度経済成長期を経るなかで、上級学校への進学率が上昇したり、消費生活が豊かになったりすると、利用者は徐々に減少する。これに行政の財政問題が重なり、1990年代には一転して、青少年施設の閉鎖や再編成がすすむことになる。

しかし、その一方で、この時期には、地域社会の人間関係が失われて人々が孤立するようになる。そんななかで、青少年も、成長のために不可欠の身近な人づきあいの経験の場を失う。また、これと並行して人づきあいの場が学校のなかに限定されると、不登校やいじめなどの、それまででない問題が広がることになる。

このような状況のなかで、熱心な職員や住民によって、青少年のために学校教育とは別のところに人づきあいの経験の場をつくろうとして考えられたのが、居場所タイプの青少年施設である。

3 青少年センターへの期待

居場所タイプの青少年施設には、大阪府立青少年会館別館（プラネット・ステーション）や東京都青少年センターなどの前史があるが、広い範囲にわたって注目されるようになるのは、平成9年、ゆう杉並が誕生してからのことである。

ゆう杉並は、大きな反響を呼んだが、それにもかかわらず、これに続く居場所タイプの青少年施設の数に限られていた。そもそも行政施策のなかで、青少年施策の優先順位は決して高くなかったし、それに加えて、居場所タイプの青少年施設の意味が理解されにくかったという理由もあるだろう。しかし、そんななかでも、横浜市には比較的早い時期に居場所タイプの青少年施設が誕生した、ということである。

その後の交流センターの軌跡を振り返ってみると、そこでおこなわれてきたのは、まさしく今日の青少年にとって必要とされることがらだった。スタッフの人数や運営経費などをみれば、恵まれた条件が整っていたとはとてもいえないなかで、これはたいへん注目されることである。

今後に期待されるものも多い。最後に、交流センターの課題を三点にわたって挙げておきたい。

第一に、地域の住民や団体とのあいだの関係づくりをすすめることである。当初、地元の中学校長や町内会長などが参加する運営委員会が組織されていた。また、その後、鶴見区の生麦地区センターを中心とした共同事業¹⁾がおこなわれるようになっていく。このような方法による地域の住民や団体とのあいだの関係づくりを、より一層すすめる必要がある。青少年施設が単独で青少年支援をおこなおうとしても限界がある。地域の住民や団体の支援があってはじめて青少年施設の役割が果たせるともいえるのである。

第二に、学校や福祉施設などと連携して、交流センターだからこそできる青少年支援の事業をおこなうことである。これは、わたしの反省でもあるのだが、これまでのように青少年施設を学校教育とは別の教育文化活動がおこなわれるところと考えるだけでは、青少年施設の役割を行政や住民に対して明示することは困難である。広い範囲にわたる施設等を視野に入れて、交流センターの独自の役割について、具体的な事業のアイデアと共に考える必要がある。

第三に、現在の建物の耐用年数を考えれば、これに代わる施設の見当をつける必要があるのではないだろうか。その場合、その施設の条件によっては、居場所タイプの施設としての性格は変わらないとしても、その中身を、これまでと大きく変える必要が生じるかもしれない。そのことを視野に入れて、これまでの蓄積を整理し、次の施設で生かしていくことを考えなければならない。

¹⁾ 青少年交流センター運営のノウハウを活かし、鶴見区役所が推進し、生麦地区センターと地域住人が連携した“地域の青少年を地域で見守る”取り組みである「生麦プロジェクト」の立ち上げと運営に関わった。

◇参考資料

・『横浜市青少年交流センター開館5周年記念誌』

財団法人横浜市青少年育成協会 平成20年

・ひさだ くにあき

神奈川大学講師、横浜市青少年交流センター第1期運営委員長

第3章

— 高校生と連携した、 青少年の科学・自然・社会体験プログラム —

◆ I 高校と連携した青少年の体験活動事業

(財) 横浜市青少年育成協会 富岡 克之

◆ II 横浜青少年サイエンスセンターの取り組み

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 相川 弘二

I 高校と連携した青少年の体験活動事業

(財) 横浜市青少年育成協会 富岡 克之

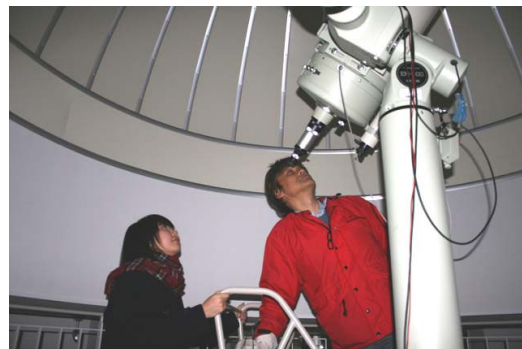
1 青少年に向けた科学体験プログラム

都市化や少子化、情報化の進展により、子どもを取り巻く環境が大きく変わり、家庭や地域における教育力の低下や青少年の直接体験が減少傾向にあると言われています。これまでは、豊かな自然や地域の人々との触れ合いを通して、創造する・工夫する・困難を克服するといった機会を得ていましたが、青少年の直接体験が不足することで、このような創意工夫や協調性を育む機会が減少していることが危惧されています。

このような課題に対応するため、(財) 横浜市青少年育成協会（以下、「育成協会」と言う。）では、横浜市内の施設や機関・団体、学校、地域等の特色や機能を活かし、科学や自然体験をはじめとするさまざまな体験機会を、青少年に意図的に提供できる環境の整備を目指し、モニター事業の実施、青少年を理解し青少年を支える人材の育成、及び市民への啓発のため取り組みを展開しています。

ここで紹介する、横浜国立大学横浜サイエンスフロンティア高等学校（以下、「横浜サイエンスフロンティア高校」と言う。）との連携事業では、青少年の体験活動の推進とともに、ライフサイエンス都市・横浜を担う次世代を育成することを目的に、小学校高学年から中学生に向けた科学体験「横浜青少年サイエンスプログラム」を、育成協会が管理運営する青少年施設や横浜サイエンスフロンティア高校の両施設および、横浜の恵まれた自然環境資源を有効に活用する形で平成21年度から事業展開が始まりました。

横浜サイエンスフロンティア高校は、先端科学技術4分野（生命科学、ナノテク・材料、環境、情報）の「ホンモノ体験」をきっかけとし



た「驚きと感動による知の探究」を理念に、「先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人間」の育成を目指しています。そんな科学技術高校と地域で青少年の体験活動を推進している育成協会が協働して、地域の青少年に向けて科学体験プログラムを展開することになりました。

この横浜青少年サイエンスセンター事業では、科学技術立国として日本の将来を支える人材の育成を図ることを目的に、小・中学生及びその保護者、さらに小・中学校の教員を対象とした理科実験の実施、横浜版サイエンスプログラム策定の準備を進めていくという取り組みがあります。そこで、横浜サイエンスフロンティア高校の先生方と協議し、横浜の恵まれた資源を活かして「なぜ?」「すごい!」「おもしろいなあ」など科学の楽しさを味わうことを通して“科学する心”を育むための多様な分野におけるホンモノ体験を提供する方向で内容を企画しました。

都会のイメージがある横浜ですが、地域に目を向けると海や川、里山、公共の学習施設など自然科学を体験できるフィールドがたくさんあることに気が付きます。活動初年度ということもあり、無理なく確実に実施できるフィールドとして、育成協会が管理運営する横浜市野島青

少年研修センター、横浜こども科学館、そして、横浜サイエンスフロンティア高校の施設や周辺環境を活用したプログラムを展開することになりました。

2 子どもの主体性を引き出す“ホンモノ”体験

横浜青少年サイエンスセンター事業の6事業のうち、育成協会は①野島海岸の海の生物観察、②鶴見川河口での汽水域の生物観察、③野島公園の地層と化石探検、④横浜こども科学館のプラネタリウムでの天文教室と横浜サイエンスフロンティア高校の天体ドームを使った天体観測、⑤自立型ロボットのプログラミングの5事業を協働で展開しました。

このプログラムの特徴は、学校や家庭ではなかなか体験できない本格的な調査・観察を体験できることと、高校で専門知識を学ぶ高校生が子どものサポーターとして体験を支援していることです。

調査・観察といっても用意された教材を観察するのではなく、参加者自らがフィールドに出て生き物を捕獲したり、水質調査用の水を採取したり、地層の中から化石を発掘するといった教材採集の実体験をします。子どもたちはこのフィールドワークだけでもワクワクしています。そんな子どもたちの探究心を更に掻き立てるのは、電子顕微鏡や実態双眼顕微鏡といった本格的な実験機器です。普段は学校でも高価で貴重なため気軽に使わせてもらうことができない機器で、思う存分に自らが採集した教材を調べることができる環境は、子どもたちの探究心を掻き立てていることでしょう。活動中は「あれも調べてみたい」「これも顕微鏡で見てみたい」と声もあり、採集したものを両手に持って帰ってくる子どもの姿も見られました。

また、横浜サイエンスフロンティア高校の天体観測ドームにある大型天体望遠鏡を使った木星や土星などの天体観測体験や、自立型ロボッ

トの動きをプログラミングし、思うようにロボットを動かしてみるなど、どれも本物に触れる機会になっています。

さらに、単なる科学体験イベントように「楽しかった」だけで終わることがないように、調査からはじまり、観察し、結果をまとめ、発表をするといった一貫した学習サイクルで行われていたため、参加者アンケートにおいても「新しい発見をした」「新しく知ったことを家の人にも伝えたい」「難しかったけど、できた時は嬉しかった」など理解の深まりや気づき・発見といった意見が多く聞かれます。

そして、このような子どもたちの主体的な参加や学習意欲を促進しているのは、サポートしてくれている横浜サイエンスフロンティア高校の生徒の存在です。高校生は1班4～6人グループリーダーとして、グループ内の雰囲気作りから実験機器の説明、フィールド調査、観察、結果のまとめ、グループ発表までの活動をサポートします。



子どもたちは、大人側の難しい説明を分かりやすく噛み砕いて伝えてくれる高校生の存在が大きいようで、「高校生が普段知りたいと思っていたことを優しく教えてくれた」という声も聞かれました。近い年齢の高校生がいることで、気軽に相談や質問できる雰囲気の中で安心して活動でき、主体的な参加が生まれているのだと感じます。

一方、高校生にとっても子どもたちとの関わりは貴重な体験だったようです。

「自分では分かっているのだけど、他人（特に小さい子）に分かってもらうのは難しい」「自分の知識や理解が浅いことを知った」など、自分自身を振り返る機会になった生徒もいれば、「ありがたい言葉の温かさを実感した」「人に何かを教えて喜んでもらい、自分も一緒にそれを共有できるのも良かった」など、自分の活動を肯定的に捉え、人と関わることの喜びを知ることができた生徒もいたようです。このように、普段あまり接することのない小中学生との触れ合いは、コミュニケーション能力の向上、そして、学んだことを他者に伝えることは、自分の知識の整理や確認、教えることでの自分自身の新たな発見になり、サポーターとしての活動は高校生自身の成長に繋がっています。

このように、一方通行の関わりではなく共通の体験を通してお互いが共に育つ関係を築けていることも、このプログラムの特徴といえるでしょう。



3 新たな青少年育成事業の展開に向けて

このような本格的な科学体験ができるということもあり、初年度（昨年度）に比べ応募者も増え、どのプログラムも定員の2倍～3倍もの応募があり需要の多さを実感しました。また、今年度からは小・中・高の連携を意識し、市内の中学校の理科部・科学部にダイレクトメールで呼びかけた結果、部活単位で参加してくれる

ようになりました。さらに、昨年度このプログラムに参加していた中学3年生が横浜サイエンスフロンティア高校に入学し、今年度は活動を支援する側として活躍してくれるなど、いろいろな繋がりが芽生えてきています。

今後は、横浜青少年サイエンスセンター事業が少しずつ認知され、参加者も増え、プログラムを通して学んだ理科の楽しさや面白さを「次の世代に伝えていく」繋がりができてくるような仕組みや仕掛けをしていきたいと考えています。

最後に、この事業を通し、専門機関との連携はより深くより魅力的な事業内容を生み、さらに高校生が関わることで世代間が繋がり、お互いを高め合う効果的な育みへと繋がること分かりました。近年、地域での青少年活動は魅力に欠け青少年の参加も少なくなり、衰退してきていると耳にします。その原因は少子化や地域の繋がりの希薄化だけではないような気がします。

もっともっと大人側が活動の楽しみを知り、それを伝えていくこと、そして地域資源を活用することが、学校や家庭はもとより塾でも学べない、魅力的な事業展開が生みだし、地域の青少年育成活動を盛り上げるポイントなのかも知れないと感じています。

・とみおか かつゆき

(財) 横浜市青少年育成協会 企画営業課

II 横浜青少年サイエンスセンターの取り組み

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 相川 弘二

1 横浜青少年サイエンスセンターの取り組み

ライフサイエンス都市・横浜を担う次世代を育成することを目的に、小学校高学年から中学生に向けた「科学体験プログラム」を横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校（以下、「横浜サイエンスフロンティア高校」と言う。）と（財）横浜市青少年育成協会（以下、「育成協会」と言う。）が連携して展開しています。

また、このプログラムは、すでに平成21年より育成協会の指定管理施設と横浜サイエンスフロンティア高校の施設とを有効に活用し、高校生や大学生が小・中学生を指導する形で実施しています。

平成21年度は6事業を7日間、22年度には6事業を9日間実施しました（表1）。

2 高校生のアシスタント参加とその成果

このプログラムでは、横浜サイエンスフロンティア高校の生徒が、小・中学生およびその保護者を対象に、科学の実験や実習・フィールドワークを実施し、地域の方々に対して科学に対する裾野を広げる活動を行っており、本校の一期生（2年次生）、二期生（1年次生）の生徒がアシスタントとして積極的に参加（表1）しています。プラネタリウムや天文教室では高校生1人当たり小・中学生10名程度、フィールドワーク時には高校生1人当たり小・中学生2～4名を担当し、実験や実習のサポートや説明をしたり、質問に答えたりしています。高校生の参加人数は、平成22年度は21年度より延べ人数で8割増となっています。

表1 平成21年度、平成22年度に実施した横浜サイエンスセンター事業の実施結果

平成21年度の実施プログラム	実施日	実施場所	参加者			高校生
			小学生	中学生	保護者ほか	
1. 移動式プラネタリウム	8月27日	横浜サイエンスフロンティア高校	178			13
2. 移動式プラネタリウム	8月28日	横浜サイエンスフロンティア高校	276			12
3. 野島海岸周辺の自然観察	10月18日	野島青少年研修センター	27	6	67	13
4. 鶴見川河口の自然観察	11月15日	横浜サイエンスフロンティア高校	41	1	68	7
5. 天文教室「プラネタリウム上映」	12月18日	はまぎん こども宇宙科学館	19	7	83	7
6. 天文教室「天体観察」	12月19日	横浜サイエンスフロンティア高校	20	6	24	7
7. 自立型ロボットを動かす、学ぶ	2月14日	はまぎん こども宇宙科学館	29	9	—	10

平成22年度の実施プログラム	実施日	実施場所	参加者			高校生
			小学生	中学生	保護者ほか	
1. 移動式プラネタリウム	7月28日	横浜サイエンスフロンティア高校	99	4	77	21
2. 移動式プラネタリウム	7月29日	横浜サイエンスフロンティア高校	34	4	95	20
3. 野島海岸周辺の自然観察	9月26日	野島青少年研修センター	26	16	21	10
4. 鶴見川河口の自然観察	10月10日	横浜サイエンスフロンティア高校	11	6	12	10
5. 地層と化石探検	12月23日	野島青少年研修センター	25	19	17	14
6. 天文教室「プラネタリウム上映」	1月8日	はまぎん こども宇宙科学館	255			16
7. 天文教室「天体望遠鏡による天体観察」	1月9日	横浜サイエンスフロンティア高校	19	15	37	13
8. 自立型ロボットを動かす、学ぶ	2月6日	はまぎん こども宇宙科学館	22	16	—	12
9. 自立型ロボットを動かす、学ぶ	2月13日	はまぎん こども宇宙科学館	30	8	—	12

この活動は、参加者の小・中学生にも高校生にもお互いにとても良い効果をもたらすものでした。

小・中学生にとっては、学校や家庭ではなかなかできない実験・実習さらには観察などを体験することができます。また、電子顕微鏡や実体顕微鏡、大型天体望遠鏡などの実験機器とのふれあいを体験することで興味・関心を高めることもできます。さらに、大人から教わるのではなく年齢の近いお兄さんやお姉さんから説明してもらうことで、より分かりやすく身近に感じることができ、質問もしやすいと思います。お兄さんやお姉さんの背中を見て憧れを抱いてもらい、目標にしてもらうことにもつながります。また、同伴された保護者も子どもと同じ体験をすることで、帰宅後、親子間で話題にすることができたのではないのでしょうか。

アシスタントの高校生にアンケートを取った結果、全員が「また参加したい」と答えていました。それは、自分が説明する立場になることはほとんど経験がなかった中で、言葉づかいに気を配ったり、分かってもらえる方法を考えたり、そして話しかけたりしたことで、参加者に感謝してもらったことが、こうした感想につながったのだと思います。また、高校生のうちの何人かは「自分自身も楽しんだ」と答えていました。それこそが相手に面白さが伝わる大事なことであり、そのことに気付いてくれたと嬉しく思っています。さらに、「参加したかいがあり、相手だけでなく自分のためにもなりました」「教えることは難しいことだということがわかりました。それでも説明するということはこれからも使える能力だと思うので、このようなイベントにこれからも参加してそういう能力を身に付けていきたいと思いました」など、参加する前に比べて明らかな成長が感じられます。

アシスタントの高校生たちは、実験・実習の内容やフィールドワークの方法、実験機器の説



明などをやさしい言葉でわかりやすく説明する必要があります。やさしい言葉で説明することは想像以上に難しいことであり、そのためにはかなり学習して自分の中で理解しなければなりません。その学習の過程や本番に向けた準備、当日の対応などのすべてが、高校生自身を成長させ、スキルアップにつながったのだと思われます。例えば、当日初めて顔を合わせた小・中学生と一緒に活動するためには、自己紹介をしたり活動内容を説明したり、さらには、その日発見したことや活動のまとめなどを小・中学生が発表する際の資料づくりをサポートする必要があります。そのためには同じグループのメンバーに積極的に話しかけたり、安全に注意したり、まとめ方の指導をしたりなど、さまざまなことに気を配らなければいけません。高校生にとって、それらの全てが“理科の知識を深める”だけではなく、高校生自身のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上につながっていくと思われます。

今後、この活動がさらに広がり、参加者数も拡大し、さらに数年後には参加した小・中学生が高校生になってアシスタント活動を行ってくれることを期待しています。

そうなれば、理科好きな子どもたちが増えていくことにもつながり、科学技術立国である日本の将来に期待が膨らんでいけると思います。

・あいかわ こうじ

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 主幹教諭

第4章

— 困難を抱える若者への就労支援の取り組み —

◆ I 団体・地域と連携した若者の就労支援

～横浜市野島青少年研修センターにおける「自立支援事業」の展開～
(財)横浜市青少年育成協会 横浜市野島青少年研修センター 二瓶 信一

◆ II よこはま型若者自立塾「JOB CAMP」

特定非営利活動法人ヒューマンフェローシップ 神垣 匠吾

I 団体・地域と連携した若者の就労支援

～横浜市野島青少年研修センターにおける「自立支援事業」の展開～

(財)横浜市青少年育成協会 横浜市野島研修センター 二瓶 信一

1 横浜市野島青少年研修センター

横浜市野島青少年研修センター（以下、「研修センター」と言う。）は、全国的にも類を見ない、大規模の自炊型の宿泊研修施設です。野外活動施設を除いて、宿泊定員である200人が自炊をしながら研修活動を行うことができる設備がある施設は非常に珍しく、小学校の体験学習や青少年団体の研修活動に広く活用されています。

また、規模の大きい団体の利用だけでなく、地域単位で活動する団体が同時に利用することにも対応できるよう、複数の研修室や厨房等の設備が備えられています。

例えば野外活動施設では、雨天時の対応や生活面で、団体の指導者・育成者の野外活動に関するスキルが要求され、研修内容が制約されてしまうことがあります。全天候型の研修センターは、団体が普段行っている活動の延長として、研修目的に沿ったプログラムを計画することができます。さらに、青少年の育ちにとって大変重要である、「お互いに協力しあうことの大切さ」を、集団での宿泊体験や“作って食べること”を通して感じてもらうことができる施設です。

■施設の特徴を活かして

このような施設の特徴を十分に活かし、研修センターでは、団体の活動がより主体的・効果的になるように、市内では珍しい、漁業や海・山に恵まれた野島周辺の自然環境資源を活用した体験活動プログラムを、近隣のさまざまな機関・団体、地域とともに開発・提供しています。

これまでに提供したのは、『食育プログラム（野島カレー、横浜マイスターによる親子クッキングキャンプ等）』『自然体験・環境保全プロ

グラム（バードウォッチング、オールクリーン野島ビーチ、カヌー体験、漁業体験、海苔づくり等）』など、青少年育成団体や学校が活用しやすいプログラムです。

こうした体験プログラムや施設の特徴を、他のプログラムにも役立てることはできないだろうかと考え、青少年育成と若者自立支援を包括的に捉えた体験プログラムの開発に取り組み始めました。

そこで、「若者の自立支援に取り組む機関・団体の支援をいかにして行うか？」をテーマに、専門機関・団体のスタッフと検討を重ね、「野島自立支援プログラム・若者自立サポート事業」として、さまざまな困難を抱えた若者が地域や社会と繋がるきっかけの場を提供する事業を協働で実施することができました。

本報告書では、その一例として「よこはま型若者自立塾」の活動支援を取り上げます。



2 「よこはま型若者自立支援塾」との協働

「よこはま型若者自立塾」は、「長期にわたり不登校・ひきこもり状態にあった若者」を対象に、横浜市が展開している取り組みです。研修センターの特徴を活かし、この取り組みに対しどのように支援できるのか、「よこはま型若者自立塾」の運営団体である特定非営利法人ヒューマンフェローシップのスタッフと検討した結果、6泊7日の宿泊プログラムを「ジョブキャンプ」を実施することになりました。

このプログラムにおける研修センターの役割は、“地域や社会とのつながりを意識できる体験活動”と“集団生活”、2つの“場”の提供です。

■ “つながり”を意識できるように

“地域や社会とのつながりを意識できる体験活動”に関しては、単に就労体験をするだけでは“つながり”は意識できません。この役割を果たすために、これまで培ってきたつながりや実績を活かして地域に出向き、野島公園や釣り舟屋での就労体験をコーディネートしました。これは、公園や釣り舟の利用者やお客様と塾生たちが関わることで、“つながり”を少しでも実感できる場になるようにと考えたものです。

また、就労体験の場として、研修センターで行っている「施設点検」を提供しました。

施設点検は、植栽の刈り込みや厨房の食器点検、浴室の清掃等多岐にわたりますが、作業した成果を皆で確認できるばかりでなく、利用団体に「きれいで気持ち良い」と喜んでもらえる機会として捉えました。



さらに、“集団生活”については、規則正しい生活リズムを取り戻すとともに、お互いが協力し、食事づくりや片付けを行い、連帯感を味わえるよう工夫しました。

■関係者の気づきと事業の成果

参加した若者自身へのジョブキャンプの成果は、後述のヒューマンフェローシップ神垣氏の報告に譲り、ここでは、研修センターがコーディネートした、地域の人たちや研修センター職員の気づきと成果について記述したいと思います。

研修センターでジョブキャンプを実施するにあたり、センター内の作業だけではなく、周辺の地域での就労体験の場を提供できないかと考えたのは、参加した若者たちが、自身の課題解決のために、より多くの人とのコミュニケーションをとって欲しいという願いもありました。

まず、塾生の受入れをお願いしたのは、日頃から研修センターが関係を築いている野島公園の管理事務所や野島町内会、そして近隣の漁業関係者の方々です。お願いした当初は、「困難を抱えている若者の支援」という言葉から、「何か特別なことをしなければいけない。大変なことなのではないか」と考えていたそうです。

そこで、地域の方々には、特別な対応は必要ないこと、スタッフも同行するので一緒に作業をさせていただきたいということ、塾生にどんな作業をするのか具体的にきちんと説明をしてほしいこと、そして、作業内容を理解すれば彼らは一所懸命に取り組むことができること、をお願いしました。

実際に彼らを受入れ、一緒に作業していただいた地域の方々は、「何も特別なことは無く、難しく考えず一人ひとりに向き合えば良いんだ。本当に一生懸命に作業に取り組む姿勢に感心した」と言ってくださいました。研修センターの職員も、植栽の手入れや多量の食器の洗浄に黙々と丁寧に取り組む姿と作業の出来栄に、心からのお礼と感謝の気持ちが生まれました。

お互いに、清々しい、気持ちの良い空間を共有することができたと思います。また、ジョブキャンプの閉会式で塾生から「達成感を得られた」という感想が聞け、職員自身も改めて仕事のあり方を振り返ることができたとともに、今後のプログラム展開に対する新たな意欲も生まれました。

一番の成果は、この取り組みを通して地域の方々や研修センターの職員が、塾生たちと共に作業し、また、時間と気持ちを共有できたことではないかと感じています。

■大切にしたいこと

“若者の自立支援”という看板を掲げてしまうと、難しいことのように捉えてしまい、一歩踏み出して主体的に関わろうとする気持ちより、専門家に任せておいた方がよいのではないかと考えがちです。

しかし、今回のプログラムにおける地域の方々のように、彼らと一緒に活動することで気づきが生まれ、自分にも何かできることがあるのではないかと考えられるようになることが大切だと思います。

今後も、研修センターで実施する事業や地域と連携した活動に彼らが参画できる場を増やし、その成果を発信することにより、地域や社会、人とのつながりの中でお互いに気づき、相互に成長して行くことができる場を創出していきたいと思います。

・にへい しんいち

財団法人横浜市青少年育成協会 横浜市野島青少年研修センター

センター長

Ⅱ よこはま型若者自立塾「JOB CAMP」

NPO法人ヒューマンフェローシップ 神垣 匠吾

「よこはま型若者自立塾」とは、年間を通して行われる合宿型・通所型の就労体験プログラム JOB CAMP（ジョブキャンプ）と、その後の横浜市内の企業などでのインターンシップや就労支援のプログラムを行うフォローアップ事業とで構成されています。

JOB CAMP は働くスキルを学ぶのではなく、働くことの喜びや楽しみを発見するためのプログラムで、毎回 10～20 名のチームでさまざまな JOB（就労体験）に取り組みます。JOB とは単なる就労体験ではなく、実際に地域で課題になっている事柄——例えば、人手が足りず荒れてしまった土地や畑の開墾・里山の保全・海岸の清掃活動・地域イベントのお手伝いなど、チームの力で人々や地域のために何か役に立つことを行っています。

「一人ではなかなかできなかったこともチームで行うことで達成でき、実際に体を動かし働くことの喜びや形になることの喜びを味わう。また、それを仲間と共有する」ことが、JOB CAMP の意義です。仕事をすることに自信がない、働き出すためのきっかけが欲しい、働くことの喜びを感じたい、もっと違う生き方・働き方がないかと考えている、誰かのために何かしたい、そのような人たちの第一歩となり得るプログラムです。



平成 22 年度、横浜市野島青少年研修センター（以下、「研修センター」と言う。）では 4 回の JOB CAMP 合宿（表 1）を実施しました。

（表 1） 平成 22 年度野島青少年研修センター JOB CAMP

実施月	プログラム内容
6 月	カヌー教室
	研修センター総点検
	野島公園花壇整備
8 月	野島公園内草刈り
	野島公園 旧伊藤博文邸庭園美化清掃
	クラフト作成
9 月	研修センター総点検
	野島公園 旧伊藤博文邸庭園美化清掃
	オールクリーン野島ビーチ（海岸清掃）
12 月	研修センター総点検
3 月	研修センター総点検
	JOB CAMP フェスタ

3 か月に一度の研修センター総点検には毎回一緒に活動させていただくようになりました。研修センター総点検は JOB CAMP が始まった当初からプログラムの一つとして協力してもらい、継続的に行ってきた結果、徐々に研修センタースタッフからの信頼も感じられるようになりました。厨房の総清掃やゴミコンテナ・大浴場の清掃など人手が多くかかる作業に微量ながらも力になることができていると考えています。

また、研修センター周辺では、野島公園美化整備、野島神社清掃、海岸清掃などの手伝いを行っています。

野島公園内での活動においては、（財）横浜市

緑の協会の方々と協力して、研修センター周辺の花壇整備や伊藤博文邸の草むしり、野島神社では町内会の方々と協力し、草むしりと落ち葉掃きを行いました。9月には「海をつくる会」が主催するオールクリーン野島ビーチに参加し、海岸の清掃及びゴミの分別作業を行いました。いずれの活動においても、作業後には感謝の言葉をいただくことができ、同時に、地域の方々と一緒に一つのことをやり遂げたという一体感と達成感を味わえたことが、参加者にとって良い経験であったと感じています。今後は今年度お世話になった方々に信頼していただけるような活動を継続的に行っていくことで、研修センターや野島公園および地域への貢献につながることができれば幸いです。



実際に参加したメンバーの感想をいくつかそのまま紹介します。彼らの言葉が JOB CAMP の一番純粋な評価になると考えます。

「ほぼ初対面の人とも一緒に話をする事が出来た。皆と過ごして行く内に段々と自分から参加していく様になって、皆と笑い合いながら、作業を行う事が出来た。作業を行う際に、行動を起こすのが遅かったので、そこを直して行きたい。正直なところ、意外と楽しめたというのが、今の本音。腕も足も身体中が疲れましたが、いい体験が出来たと思う。やり通した時は、少しだけ自分に感動した。少なくとも、一週間前の自分と今の自分は精神的にかなり成長する事により、普段と違う心でいれていると感じた。」



「初対面の人が多かったので、今思えばもっと積極的に接していけば良かったと後悔しています。作業をする時は、皆で常に協力して与えられた仕事をしっかりとこなしていけたので、それはとても良かったことだと思うし、一緒にやることで、他の人たちの助けがあって作業がはかどったり、肉体的・精神的な疲れも軽減できたりなど、色々と良い経験になりました。また機会があれば参加してみたいと思うし、今度はもっと頑張っ楽しんで、沢山良い経験を積みたいと思います。」

「参加者もスタッフの方もみんないい方たちでした。“外の世界や他人に慣れること”はある程度は達成できたように思います。自主的に人とコミュニケーションをとって協力して作業したりすることは、ほとんど出来ませんでした。

ずっと家にひきこもっていて、現実のことを考えないように生活していたので、自分の周りのことが他人事のように現実感がないように感じてしまいました。自分の問題点を少しでも認識できたので、参加して良かったと思います。」

「自己目標としていた、自分に負けないということに対し、少しは成長した気がする。でも、率先して掃除・料理の片付けが出来なかったことは残念。体調をくずした時に、仲間に気配りや仕事のフォローをしてもらってうれしかった。これからは、自分がしてもらったことを相手にできるようになりたい。キャンプを通して少しずつ明るくなった気もする。」

JOB CAMPでは作業だけでなく、合宿を通じて“共同生活”をするということがとても重要な意味を持っています。こうした考えから、事前のプログラム構築から合宿中の生活面・安全面の心遣いなど、研修センタースタッフによる、塾生たちへあたたかく細やかな配慮は事業実施の上では欠かすことができません。

メンバー同士のコミュニケーション、そして関わる人々とのコミュニケーションが、各 JOB CAMP の成功や失敗、もしくは行方を、いつも担っていると言えます。その意味で、研修センターで過ごす合宿の日々は、毎回言葉では表せない気持ち良さと過ごしやすさにあふれています。

・かみがき しょうご

NPO 法人ヒューマンフェローシップ よこはま型若者自立塾

担当スタッフ

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集
YOKOHAMA EYE'S 2010

平成23年3月 発行

■編集・発行

財団法人 横浜市青少年育成協会

〒231-8454 横浜市中区住吉町 4-42-1 関内ホール地下1階

TEL : 045-662-3716 FAX : 045-664-6254

MAIL : kikaku@yokohama-youth.jp

URL : <http://www.yokohama-youth.jp/>



※財団法人 横浜市青少年育成協会は、平成23年4月1日から
「公益財団法人 よこはまユース」に名称変更します。
